

翻訳

ロシア当今の政治体制と空隙

尾崎誠¹⁾、ヴァシリイ・グリツエンコ²⁾、タチアーナ・ダニルチェンコ³⁾、中富清和⁴⁾

キーワード：ロシア、政治体制、民主主義、政治的空隙、相互理解

序章 国家

かつてヘーゲルは「国家は世界における神の歩みである」(『法哲学』)といったが、それは必ずしも当時既存の国家を地上における神の国、神性の顕現と直接肯定したわけではない。実際には悪しき国家も存在し、それは、しかし、理性によって淘汰されて、歴史上から消滅せざるをえない。ヘーゲルはむしろ国家一般、理念としてのあるべき国家像を指して、神性の顕現としての国家の存在意義を闡明したのであろう。そのことは田辺哲学の国家論についても同様であろう。田辺哲学では当初、国家の存在を絶対者の応現、神の地上における受肉としてのキリストに対応するものとしたが、それも直接現存する国家を絶対肯定するものではなく、あくまでも理念のレベルに留まるものであった。しかし後に、国家にも善悪の二重性のあることを認識し、国家は直接無媒介に、即自的に、それ自体で善、ないし絶対の顕現なのではなく、その善悪の均衡した中間的方便存在と再規定した(『種の論理の弁証法』)。そして国家にも悪の契機の潜在することを認め、宗教的懺悔の行為によって悪を浄化し、善への転換、人類的普遍性の実現を目指すべきことを論じた。国家存在は類と個との中間存在として種のレベルにあり、それは善悪両方へ動揺し、善を実現することもあれば、悪に転落することもありうる、とした。それが種の二重性であり、方便性である。従って、それは決して所謂国家至上主義や国家絶対論ではない。国家も個と同様に、常に悪への根源的傾向性を免れず、たとえ善を実現したとしても、その現状に満足し、さらなる自己否定を続行しなければ、やがて悪へと転化せざるをえない。国家存在の善悪両面への根源的可能性を指摘し、さらに人類的普遍的真理と世界的公共善と正義といった共通価値の実現に向けた類・種・個の三極弁証法を説いたことは、今日の世界情勢を鑑みるに、極めて重要な意義を存するものと考えられよう。

最近、頓に顕著になった所謂領土・領海の国際的紛争問題も、種のレベルにおける国家間の直接的自己肯定だけでは解決不能であろう。種を超えた類的普遍性の次元に立った視点からのみ、問題は解決の根本的方向性を見出すことができよう。ヘーゲルのいうように、普遍的本質としての国家は理性的である時のみ、真に現実的となることができよう。逆に反理は非現実的にすぎない。

中国にマルクス主義政治体制が確立されたことも決して偶然ではない。その最古の文献『易経』

1) 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科教授

2) ロシア国立クラスノダール大学文理学部哲学科主任教授

3) 同講師

4) 千葉県立東金商業高校教諭

には陰陽の二元対立を統一する弁証法論理が胚胎し、超越神を語らない儒教の現実社会における世俗体制の維持機能といった現実的志向性とその歴史的土壌・背景にあるものかと思われる。

ここでソ連邦崩壊後のロシアの政治的現実を目を向けると、その民主化へと移行した今日の社会は果たしてどのように機能しているのであろうか。またその民主化のプロセスにおいて何らかの空隙・間隙は生じなかったのかどうか。さらにグローバル化する国際社会における差異の構造はどのように維持・展開されるのか。例えば、ギリシャ危機の問題も単に経済的次元だけではなく、また地政学的価値観からも捉えられなければならないであろう。領土・領海はまさに地政学的価値に関わる。諸国家間の種の次元と世界人類の普遍的次元との立体的交差が現代世界の直面する歴史的現実の構造として前面に躍り出てきている。

アメリカでもオバマ大統領が接戦の末、再選されたが、これもかつての所謂古き良き時代が去り、今や増大する貧困層や中間層の存在がアメリカ社会全体の歴史的課題となっていることの反映でもあろう。またそのアジア重視の政策転換も急激に台頭する中国の覇権主義的拡張への対抗でもあり、将来の新たな世界構図の再構築でもあろう。そこには個々の国家を超えた、より大きなブロック国家群の形成へと向かう歴史的趨勢があり、既にヨーロッパはそれを達成したが、その内部に潜む波乱要因も、論理的には同一性と差異との構造化の問題として歴史における弁証法的運動によって解決を図られるべきであろう。田辺哲学の国家存在論は既にこのことを予見していた。

和辻倫理学も個と社会全体との交互否定を説き、絶対空たる絶対的否定性が不断に否定を繰り返すところに歴史が展開するとするが、その否定性の停滞は悪とされる。種的国家がその自己否定の機能を失い、直接自己を絶対肯定するに至るならば、相対的国家間の衝突・対立は避けられない。不断の否定的転換こそ、種の限界を脱却した、類への超越にして、しかも種への内在ともなる。今日、絶対無の否定的転換の弁証法を標榜する田辺哲学の国家存在論、その政治と宗教との否定的媒介関係の論理がグローバル化する世界にとって極めて有力な思考法を提供するものと考えられる。領土・領海の問題は、異文化の交差する位相差の問題でもあり、論理的には種と類との相互否定的媒介の関係性によってより高次の次元において歴史的発展の形として統合化されるべきであろう。

ロシアの政治状況と我が国のそれとの間にどれだけの径庭が存するのかも興味深い。ここにロシア国立クラスノダール大学グリツエンコ教授とダニルチェンコ博士のロシアの政治的現実と間文化的位相差における空隙に関する論説を紹介する。前者は第一章、後者は第二章を担当し、中富が下訳し、最終的に尾崎が全体を監訳した。

第一章 ロシア当今の政治体制

ここではロシア当今の政治体制と政権の支配的性質についてその特徴を論ずる。それは民主主義の今日的形態の形成にとって本質的である。我々の関心の主題は、現代ロシア社会の類型的特点である。ここでは、我々はロシアにおける政治体制と政権の支配的性質に関心がある。

多くの専門家によれば、国家経済の構造と経営の経済政策は当初から原料型の経済機能の維持に向けられてきた。原料経済は客観的には非民主主義的政治体制の類型に特徴的な独占的、官僚的、新興財閥的なものであり、基本的には腐敗堕落している。そのような経済は長期的には無価値、無用なものとなる。

我々は、イデオロギーや精神性の性質、またエリートの質は政治体制の諸条件、また原料経済

の諸条件によってさえも、影響されるというこの見解には全面的には同意しないが、それは重要な役割を果たしうる。

第2回ロシア社会学会議が開かれた当時(2003年)に表明された V.I.Dobrenkov の立場はかなり広まった。ロシア社会学者の意見によれば、ロシアに生じた新興財閥資本主義体制は、自由資本主義と社会主義の多数の否定的特徴を具現していた。

V.D.Vinogradov はロシア社会の主要な特徴の定義として、「基本的矛盾」というマルクス主義原理を使用する。

1993年憲法によれば、あらゆる権力は大統領の手の下に集中される。それ故、今日、社会、国家、一般市民が経験している多くの否定的諸問題の決定は実質的に大統領の政治的意志に依存している。大統領は経済、政治、社会の諸領域で大幅な権限を所有する。大統領府は指導的専門家集団として政策決定の知的部門を担当する。それ故に、ある人々が政府の現存形態を大統領的であるとか、あるいは超大統領的でさえあると決めつけたりしたり、また他の人々がそれは大統領的かつ議会的であるとか、あるいは三番目の意見として、それは非議会的であると決めつけても何ら驚くに値しない。A.Zudin は現代ロシアの政治体制を「独占中央集権的」と特徴づける。しかし、これはロシアの政治体制の特徴を明確化してはいない。というのは、歴史上において多数の「独占中央集権的」体制、例えば西ヨーロッパの絶対主義、ロシアの専制政治、軍事独裁などがあるからである。

K.G.Holdkovsky の立場はより良いように見える。彼は、ロシアの体制は制度的よりも個人的特徴を多くもつと考える。この立場は Y.I.Pivovarov によって次のように定式化された。即ち、「ロシアは個人化された権力により統治されている」と。2005年の世論調査では、応答者の55%は次のように確信している。即ち、ロシアの権力の源泉と統治権の実行者は、憲法に書かれているように民衆ではなく、大統領である、と。この特徴は独裁政治の時代からの歴史的伝統に深く根ざしており、統治者はその痕跡を支配様式(改革主義と保守主義の変異)や、統制方法の上に残している。20世紀から21世紀の初めのロシアの歴史は際立ってレーニン、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフ、ゴルバチョフ、エリツィン、プーチンの名前と結び付く。市民、世論は明らかに個人化された権力を要求する。この観点から見ると、インターネットのようなフィードバック機能をもつある種の形態は、個人化された権力の影響を強めたり、弱めたりすることができる。それらがそれを効果的にすることができるということが重要なのである。

1993年に採択されたロシア憲法の支持者である M.Krasnov は、政治体制の形式的枠組みのみならず、その本質の決定においても役割を果たした。しかしながら、例えば K.G.Holodkovsky 等、他の起草者達は、極めて困難な政治的状況の中で生まれた憲法のテキストには矛盾がないわけではない、と考える。一方では、1980年代後半から1990年代初めにかけての民主主義運動に参加した彼は、(大部分、変更の複雑な手続きによって保護された最初の2章において)広汎な民主主義的権利と自由(17-64条)、国民の主権(3条)、権力の分立(10条)司法の独立(120-122条)を宣言した。しかし、他方では、その移行期の影響の下で、権力の特殊的構造の限定に際して、権力の分立という全体制の枠組みの中で、大統領の権力は導出された。大統領は国家の頂点に立つ広汎な権利を持つものとして、その上に置かれた(80、83-90条)。こうして、個人化の歴史的伝統は支持され、それ以上に、最高権力は制度的にも再構築された。「大統領の権力は最高の独裁者」という立場を獲得し、国境や法の適用の原理を決定する権限(法の適用ルール)を有するとされる。大統領権限の増大という2008年末の出来事は、(その減少への一般的傾向に対抗して)

更に一層この傾向を強めているのである。

B.Makarenko によれば、ロシア大統領は、投票者と直接約束する総選挙によって、一般市民の信頼を表すところの国民の承認を受ける。K.Holodkovsky によれば、大統領に帰せられる役割を満たさない場合は、1990年末にボリス・エリツインに起こったように、国民の信頼を失うに至る。彼はまた、プーチン政権は、ナポレオン3世主義や20世紀のラテン・アメリカ政権にも比肩しうる、一般国民的かつ官僚的であると規定した。2008年の大統領選挙で提案したいかなる候補者も支持するという賛同の投票数からすれば、プーチンへの絶大な信頼は既に用意されていた。この信頼の根本的な重要性は、他の権力構造—政府、議会、裁判所—がはるかに少ない信頼に甘んじているという事実によっても強調される。こうして国民的機構(投票、選挙)を通して大統領の人格を支持することは、その体制を正当化するほとんど唯一の要素なのである。

政府と代表者機関(議会)がある程度低い地位にあるのは、疑いもなく、それらの真の権力が制限されているためである。一般に認められているように、プーチン以前の政府は実務的な特徴を持ち、政治的問題の決定は、大統領府に集中されていた。首相ではない大統領はいくつかの重要な閣僚(外務大臣や治安国防大臣)に従属していた。国会は政府に影響を持たず、議会としての独自の調査権限は剥奪され、しかもここ数年の間、立法の別の領域で作られた形式的な文書を単に実務的に改善する一機関となった。更に議長によれば、議会はもはや政治的議論の場ではないことになった。年次報告を発表する政府の形式的な義務は、議会の力を変えるほどではない。裁判所に関しては、2000年に資格評議会(判事を罷免する権限を持つ統制懲罰機関)の構成には、大統領府を代表する者が送り込まれ、その多くはFSBの地方事務所の代表者である。

現政権を規定する第2の部分は、「官僚制」である。既存の体制では、最高人格(大統領)が最後の言葉を持ち、それは権力の実行にとって最も単純化したメカニズムへと導いてきた、つまり「権力の上下・垂直関係」を示す。エリツインの下では、またプーチンの下では更に一層、政策決定の実際の中心は官僚的権力、大統領府となった。それは憲法の第83条に大統領の職務を担う純粋に実務的な機関として明記されている。こうして、実際の政治権力はますます官僚トップの手に集中されている。(何よりも先ず大統領府の指導的人物を含めて、軍、最も重要な大臣や知事、与党の長、国有大企業の長から20—30人)。

連邦代表機関の機能は、議論の真似、わずかな修正と政府高官の間で容認された決定に押印するだけに限られている。既にエリツイン当初から、実際の長である高級官僚をより好むという歪みがあり、プーチン大統領時では大半の行政府内において、非公式、私的、影の関係を優先するという歪曲は決定的となった。それは伝統的なロシア官僚制に典型的なものである。政党や国家の特定の高官を含めて、すべての事柄やすべての人々を規制することができない状況下では、代表者政府(議会)の重要性は去勢化され、実際、地方ではメディアと世論の規制は弱められていない。官僚制は前例のないほど力を持ち、それは高官だけではなく、全般的に地方にも及ぶ。こうして官僚制は、ほとんど排他的に「上から下へ」と垂直的に構築された機能を有する最高権力の独占的な支配の道具となった。「トップから」のみに統制される官僚制は、伝統となんら変わらない。それはビジネスにはあまり役立たないが、何よりも自己の会社や個人の利益を追求する個人に役立つ(ここでもまた、あらゆるレベルで、権力の個人化の原理が作用している)。官僚制は、国家規模の目的とは反対に、特定の集団の目的達成のために国家の梃子を使うのである。

L.Nikovskaya と V.Yakimets がまた次のように信ずるのも理由のないことではない。即ち、団結した市民社会の存在しないところでは、官僚制は、経営の道具から権力行使へと転回する、と。

M.Krasnov は正しくも次のように指摘している。即ち、一般社会に大きく依存しない権力は、官僚制として、実際それと一体となり、それに大きく依存しながら、現在と未来を高度な複合的体系として承認する能力も意思も失う、と。複雑な計算と間接的影響が要求される場所では、未来への挑戦に関する直接的な決定への幻想がある。N.Petrov は、官僚体制は愚行への保護として、その有効なメカニズムを失った、と言っている。

こうして政治体制の第二の重要な要素は、政権内部での独立した役割をますます果たす、その主要にして基本的な要素としての官僚制を強化することである。

1990年代においてその人員を指名することによってなされた独立した政治的役割を果たす代表者政府の大部分は、陳情活動をしながら、直接独裁にまで拡大しながら、所謂少数独裁者を要請した。金融・産業資本の多数の企業の長、検察、もっと野心のあるエリート層、及び経済への国家政府の拡大介入は、以前の少数独裁者との暗黙の連携をなした。官僚制と密着した政治的要求を拒否することによって、彼等の国内外における利益は国家の利益の一部となった。当然、企業間の指導的役割を果たすのは、国有企業や上級政府高官の自己利益に適う権力に近い企業となった。

官僚制の全能とその実際の統制の欠如は、すさまじい腐敗墮落を引き起こし、すべての統制機構の効果を著しく減少させている。社会学者によれば、ここ数年の腐敗墮落の範囲は倍に増えている。賄賂の全体額は、連邦予算に比肩しうるほどで、ある情報では、それを越えてさえいる。さまざまな省庁において、又それらと業者との間に、所謂腐敗墮落のネットワークがある。その内部では、政府高官と業者との間で、政府高官は私腹を肥やす目的で、腐敗墮落ネットワークに属している業者に予算の割り当て、不法収入の増大、あるいは競争的優先権や財政保証を与えること等が行われている。腐敗墮落は本質的に組織的である。また行政機関の機能において必要な要素であり、発生する問題の政策決定の条件となっている。D.Furman によれば、腐敗墮落は国家メカニズムの損害ではなく、まさにメカニズムそのものである。権力による「仕事の確保」が同時に国家の「私物化」でもある。1990年代に始まったこのプロセスは非常に規模が大きく、政府の効率性の明らかな減少に関心を示したメドヴェージェフは、最も本質的な問題の一つとして腐敗墮落に対する闘いの最前線に押し出たほどである。

官僚エリート職員は大部分同一の個人主義的原理によって決定される。つまり、個人的知己、共通の共同体、所属企業、個人的忠誠心などである。「我々に焦点を当てよ」との要求は、権力の自己刷新メカニズムへの妨げとなり、大まかにいえば、腐敗しているのである。権力の階層的構成は、現代的理解では補助の原理に基づく連邦主義の根本原則と深刻に対立する。ロシア連邦官僚制は多数の決定と機能に関する責任を放棄し、それを地方に転嫁しようとしている(近年なされているように)。しかし、補助制度とは反対に、税収の分け前を地方に増やそうとはしていない。それとは対照的に、1990年代と比較すると、連邦予算の地方への分け前は大幅に減少した。そして地方からの補助金への財政的依存は大幅に増大した。「憲法の本質と明文に反して、連邦当局は調整機能を独占しようとしてきたのであって、地方には執行力のみ残されている」と、M.Afanasyev はいう。

国民投票的官僚制と連邦主義との両立不可能性は明らかである。中央と地方の態度には、「秩序と安定」への外的アプローチにおいて、よく知られた緊張が保たれている。中央の統一的政策は地方の主導権をマヒさせ、逆説的に、地方の生活水準と発展の不一致の増大を導く。こうして中央への地方知事の卑下は決して拡大する地方権力を軽んずるものではない。権力はその内部にお

いて仕事のみならず、個人的にも結び付いた別々の門閥や常連に分断化されている。これらの門閥はしばしば国有企業や別々の官庁に依存しており、注文の獲得に互いに競合している。政治学者の A.Kononov によれば、現在のロシアには政治的陰謀があり、それは内部の圧力闘争の領域へと移った。

民主的文化の先行形態はソビエト時代のロシアに存在した。ソビエト憲法の民主主義的特徴とソビエト評議会の現存はソビエト民主主義の基礎であった。しかしながら、民主主義の真の実践は多くの要素により制限されていた。即ち、一党支配、権力の分立の欠如、権力主義、国家によるあらゆる形態の公的、政治的、私的生活の全面的統御である。

ソビエト民主主義はマルクスとレーニンの理論に基づいている。このモデルの主要な原理は次の通りである。

第一は民主主義である。しかし、ブルジョア民主主義は資本家にとっての民主主義と考えられた。それ故に、それは社会主義革命の時代、すべての国民の国家政治への直接参加へと取って代わられた。レーニンは、ソビエトは民主主義の一形態と考えた。彼によれば、共産主義は独裁とソビエト権力との結合である。国民の政府への一般的参加は、国民が常に政府に参加し、政府を統制するので、官僚制を破壊する。将来、それは国家の破滅に導く。国家は一階級による別の階級の搾取の機械と理解された。プロレタリアート独裁はブルジョアジー国家を破壊した、人民の権力である。国家における民主主義の発展は自立した政府の形成と官僚制国家の否定へと導くべきである。社会主義政府の実務的な機能は残存したが、しかし、それらは社会的特権へと導くべきではない。

第二は権力分立の破壊である。権力分立の原理はブルジョア的であり、かつ権力の分立は官僚制の源泉であると考えられた。この原理を否定することが、ソビエトが人民の権力として、立法と行政の機能をもつと仮定したのである。

しかしながら、ソビエト民主主義形成の真の実践は、プロレタリアート独裁が指導的役割を果たしたということである。一左翼急進マルキスト政党の力が権力の国家形態となった。政治的独占がソビエトの全体主義、権威権力主義、官僚制の形成へと導いた。それ故に、ゴルバチョフのペレストロイカの期間、このモデルの広汎な民主主義化はその崩壊へと導いた。

空論的態度は USSR におけるソビエト権力の別の否定的特徴であった。未来の理論的モデル（共産主義）はソビエト官僚制により独断的に独占され、強制的に全社会に課せられた。

1990年代に民主主義の「ソビエト・モデル」は新しい形、即ち官僚制的国家社会主義に取って代わられた。このモデルの主要な諸概念は「法治国家」、「権力分立」、「市民社会」、「社会的国家」である。

ロシア連邦の現憲法のテキストは、最も広汎な一連の民主主義的諸原理を含んでいる。しかしながら、政治的民主主義の実現に向けた実際の実践は相当な批判に曝されている。ロシアの政治学者、社会学者、哲学者と政治家達は次のような現代政治体制の否定的諸側面を示している。

－現代ロシアにおいては、経済の未熟なモデルと非民主主義的政治体制との間に相関関係がある。

－ロシアにおける最高権力の真の実践は大統領的、個人的、門閥的、国民投票的官僚制という特徴をもつ。権力の真の中心は、何よりも先ず、大統領と大統領府であり、また大統領とその機関によって指名された人々である。

－真の政治的権力は官僚制の頂点が優先する。即ち、大統領府の指導的人物、主要閣僚と知事、政権与党の長、また国有大企業の長達である。

一官僚制は最高権力を実現する基本的道である。それは、ソビエト体制に特有な行政命令によって権力を行使するというやり方である。従って、優先されるのは政府の直接的な権力行使である。そのような体制は戦略的に複雑な諸問題を解決することはできず、またその間接的統制の方法ももたない。

一腐敗墮落はこの官僚制の機能上の本質的要素である。

一ロシアの現代政治体制の民主主義的文化は、権力主義、官僚制と共存している。しばしば民主主義は模倣や操作の形で示される。門閥エリートの官僚制に寄り掛かる権力主義の少数独裁と国民投票の形態は政治権力の基本的形態である。

一市民社会と市民社会的文化は未だにロシアにおける政治生活の重要な要素とはなっていない。

ロシアにおける民主主義化の新しい時期は2011年及び2012年の初めに到来した。それは2011年の議会選挙と2012年の大統領予備選挙によって惹き起こされた。政治的競争は今や増幅された。ロシアのメドヴェージェフ大統領は政治生活の民主主義化、特に選挙に関して多くの決定をなした。政党とその運動は一層活発になり、その政治意志は権力の決定に対して影響を及ぼす力をもつに至った。2011年の議会選挙では、多くの地方や多数の市民の間で権力の非神聖視化が巻き起こった。建設的な政治対話を実施できる新しいエリート層形成への傾向が示されている。政治過程は非常にダイナミックになってきた。

この論文において我々はロシア社会の政治体制の類型的特徴を考察してきた。この問題については哲学者、社会学者、特に政治学者の間に多くの観点が存する。我々の観点はこの場合、これまで考察されてきた立場についての一般化を展開してきた。

現代政治体制と経済類型との間に存する関係性は同型的ではないということに我々は意見の一致を見る。しかし、現代ロシアには原料経済と非民主主義的政治体制との間には相関関係があった一独占的、官僚制的、少数独裁的で、基本的には腐敗墮落の関係。

ロシアの最高権力は大統領、個人、門閥、国民投票及び官僚制に特徴がある。真の政治権力は数十人の官僚トップに優先的に与えられている。即ち、大統領府の指導的人物、最重要な大臣と知事、与党の長、国有大企業の長達である。

官僚制は、ソビエト体制に特有な、行政チームで権力を行使するという、「上から下へ」の最高権力の実現への基本的道である。つまり、権力の権威主義的な直接行使が優先される。そのような体制では戦略的に複合化した、多面的多段階的諸問題に関する政策決定を下すことはできず、またそれへの間接的経営の術もない。学者達が言うように、腐敗墮落と呼ばれるものはこの体制が機能する上で必要な要素であり、体制のメカニズムとさえなっているのである。官僚は「個人」原理に基づく。

ロシアの民主主義政権は形成途上にあり、民主主義は権力主義と官僚制に並行して、かつ親近的な形でその予行演習や操作において存在している。門閥エリートの官僚制に基づく権力主義の少数独裁と国民投票の形態は政治権力の基本形態である。

既存の憲法とその施行は基本的に形式的価値を有するにすぎない。長年にわたって権力の真の中心は、憲法にはほとんど明記されていない実務的機関、即ち大統領府であった。議会、政党、及び市民社会は実際にはある種の模造品となり、憲法第二章に宣言されている諸権利と自由は、特に複雑に保護された変更手続きは、ますます単なる声明にすぎなくなっている。

同時に、既存の権力、即ち大統領は、特に予備選期間中に、権力の民主主義化へのさらなる努

力を容認している。

第二節 政治的空隙(ギャップ)の概念

空隙(ギャップ)は政治的過程において人々の相互理解にとって本質的な障害となるものである。一般的に空隙とは、一つの文化に存在し、別の文化には存在しない諸項目を記述する用語である。空隙は民主主義的過程に干渉する。同時に、民主主義的過程は空隙を除去するのに最も成功した政治形態である。政治的空隙の諸課題は政治権力、政治活動と政治的態度に関わる。

政治的空隙は感覚的・心理学的、情緒的な評価、ないし理性的諸形態においてその表現を見出すことが出来る。さらに現代社会への政治的関心はしばしばかつてないほど大きく、政治的意識とイデオロギーは普遍性を熱望する。宗教的空隙、民族意識の空隙、及び法的空隙を政治的空隙から実際に区別することはしばしば困難である。それは、イデオロギーの支配的形態が現代社会においては政治的イデオロギーであるからである。政治的イデオロギーは理性的形態、即ち、概念、プログラム、理論においてその表現を見出す。

政治的空隙はその全体を表示することに特徴があるが、その他に競合においても存する。政治的空隙は、自他の社会の政治体制の特徴によって惹き起こされるような表示の諸形態に見出される。だから現代ロシアの政治空間は極端に非画一的であり、それはさまざまな地域における高いレベルでの空隙性を意味している。さまざまな地域においてその政治意識と政治文化とは非常に異なる。我々は空隙性の長期的要素を次のように呼ぶことができる。即ち、地域共同体の地理学的整合性、歴史的特殊性、経済的特徴、人口の社会的民族的構造、地域の政治的地位、ロシアの限界内における地域の地政学的価値、地方の同一性、と。従って、政治参加や選挙への志向性等の支配的諸形態は空隙性を惹き起こす短期的要素と呼ばれうる。

政治的空隙は、政治的文化、政治制度、政治権力を通じて、政治的関心とその実現形態との諸条件によって惹起されうる。

政治的文化的空隙については依然として乏しい研究状態にあり、ロシアの社会政治諸科学においてはむしろ控えめな立場にあるので、この術語の記号論的解明や政治的空隙の本質についての定義、及び分析のために、その具体例に言及することは興味深い。

政治的空隙性において客観と主観はどのように相互関係しているのかについて論ずることは重要である。空隙は客観的以上にもっと主観的に形成される。空隙性の地理学的及び社会・経済的要素について問う時、それは空隙のようなものではなく、決定因子である。空隙は客観的よりも、一層主観的に形成される。その直接的理由は、精神性、伝統、概念的あるいは言語的世界観の不一致にある。

空隙は意識の形態、及びさまざまな光景、外観の表現である。何よりも先ず、人々の共同体は、国境によって分断されているから、あるいは異なった地政学的領域に住んでいるから、異なった行動をするのではない、ということが明らかでなければならない。彼等は別様に考え、異なった社会的政治的世界観をもつから、そうなのである。彼等は同じ出来事を反対に説明するのである。

どの国も政治的現実についての認識や言語表現の仕方においてその国特有の特徴を有する。それは政治的文化的形成における国民的精神性と歴史的条件によって説明される。さまざまな国家と時代の政治的意思伝達について比較することは、単なる彼此の国家論を超えて、自と他、普遍と特殊を明確に区別する。これは国民間に間文化的寛容とより良き理解を推し進める。西洋で

は国家の指導者はしばしば船の船長あるいは舵取りに譬えられ、イスラームでは指導者は騎手に譬えられる。イスラームの指導者は、しばしば鞍の上に座る。またその権威は決して太陽のイメージとは結びつかない。というのは、破壊的太陽は東洋人を喜ばさないからである。イスラームの指導者は焦がす太陽から身を守る豊かな影のようなものであり、彼自身、「地上における神の影」である。

言語学においては空隙のさまざまな分類化がある。政治的及び世界観の空隙は有意味的に明確化された世界観、価値、信仰、立場の相違によって惹き起こされる。政治的・精神的空隙は信仰、評価、時代錯誤、社会的かつ無意識的に実施される行動を表現する。しかし、それらは実現されえないということを意味せず、意識はこの場合指導的役割を果たさないということである。

各国語は世界観と結合した二つのプロセスに参加する。一つは、言語的世界観はその中で形成される。二つは、言語は別の世界観を表現し、特殊な辞書によってその世界観に進入し、その属する個人や文化の特徴を明らかにする。ある国語による世界観は国民のある発展段階における現実性についての言語的表象によって固定された集合である。個人の直接的思考と行動は世界観の認識によって影響される。言語と世界観的認識との不一致は複雑な空隙を生じさせる。この不一致は概念領域における国民的特殊性と関連している。概念的空隙は、その対応する現象が国民によって理解されないように、言葉と概念の不在を意味する。

我々には、ロシア語で借り物の翻訳として「生活の質」、「プライバシー」、「上質の時」、「寛容」、「政治的正義」、「挑戦」、「自立」等と呼ばれるような概念はない。個人主義の究極的な結果たる「プライバシー」なる概念は多分外国人にとってもっと理解困難であろう。プライバシーという語は多くの言語において存在しない。もしそれが存在するならば、集団からの孤立や寂しさといった、非常に否定的な意味合いでしかないであろう。アメリカでは、プライバシーは非常に積極的な条件と見られているだけではなく、またすべての人間が等しく必要にして望むもの、満足のいくものとして要求されるものと見なされてもいる(R. Kohl)。「自立」という概念はアメリカ的世界観を表す。自立の人とは、自分で幸運を作る人である。つまり、貧困だったが、金持ちになったような人のことである。他方、「統合(精神的共同性)」というロシアの概念は多様性における統一の観念を表す。それは外国人には理解困難である。

概念は対応する文化の担い手にとって一般的なものであり、精神的に国民を統一するものである。しかし、理念の上においてのみそのように見えるにすぎない。実際は、必ずしもそうではなく、言語文化の国民的概念の同化の程度は別々のメンバーの間で本質的に異なる。ある概念は他の民族集団を代表する者によっては全面的には理解されえない。

これに関連して、現実的概念と不適切な概念を区別する必要がある。現実的概念は言語表現化されうるものであり、思考にとってもコミュニケーションにとっても必要である。不適切な概念は思考にとっては必要であるが、言語表現化されるのは極めて稀である。国民的概念領域の不適切な概念は集団においては現実的であり、逆に概念領域では個人的である。ある概念は、他の国民の概念領域では特殊でありながらも、ある人々や集団の意識に現れているかもしれない。情報文明に構造化された社会集団、つまり国際ビジネス集団における辞書や辞典、金融は、国内の伝統的産業や古くからある部門で生活している人々のそれとは根本的に異なることは明らかである。

同時に、ロシアの社会空間には、脱工業化経済の地方とグローバル化した共同体とがある。我々は次のことに同意する。即ち、現代の「グローバル化したロシア人」は質的に新しい共同体に属する。その共同体とは次のようなモデルを示す。即ち、物質的消費志向、しかも最も低いレベル

でも、社会的関心の領域が絶えず狭まっていること。極端な融通性、どんな社会変化にも適応する能力。仮想現実化。マス・メディア情報の崇拜。すべての道徳的問いの除去。相対的自由の選択においてさえも、権力への崇拜。文化的無差別性。

そのような社会の経済的社会的構成の異他性は、多様な関心、立場、意識設定の客観的源泉である。空隙は、例えば政治的辞書に見出されうるが、しかし、集団や個人の意識においては充填されている(即ち、空隙は排除されている)。その場合、空隙概念は集団的特徴を持ち、その集団内部で指示されるが、しかし、すべての自国民間においてではない。

こうして概念の現存や不在は、それを指示している諸単語の集まりである言語における現存や不在とは無関係である。諸概念は、意識による現実の直接的反省の結果としても生じるし、また通時的翻訳や同時的意思伝達のメカニズムを通じて知識を借用するという仕方で、異文化間の相互作用の結果としても生じる。異文化コミュニケーションの空隙は、国民の世界観や精神性の不一致、それらの概念的保持と表象の記号形態との相違によって惹き起こされる。どの場合でも、空隙は、意識の形態であって、地理学的、経済的、あるいは社会的環境ではない。

概念領域は、ある程度、精神的単位が時代遅れの認識形成の基礎であるところの国民的概念領域を形成するものとして現実を知覚し理解するその特徴を決定する。他方、概念領域は国民的精神性によって影響される。それは、既に発展してしまった時代遅れのものが、発生しつつある概念、つまり現象や出来事の評価の維持に影響するように、概念の形成と発展の動態を導く。

中国の伝統的な象徴主義と政治的隠喩の新しい成長との相互関係に関する J.Weï の観察を考察することは興味深いことである。彼によれば、権威の象徴としての帽子の比喩は広く現代台湾の政治的論議に使用されている。大きな価値はその色を持つ。即ち、赤色は賄賂、金色は金融スキャンダル、黄色は姦通と結び付く。例えば、赤い帽子をかぶっている政治家は間接的に隠喩で腐敗の張本人として糾弾されている。

さまざまな種類の言語学的探究はこれまで考察してきた問題についての言語的資料の累積と一般化へと導いてきた。異文化コミュニケーションの増大する緊急性の故に文化間、言語間の空隙を研究することは一層重要である。言語間の空隙とは、ある言語では語彙単位が現存するが、他の言語では不在であるというものである。国民的・文化的特殊性の生起を促進し、強化する要素の中でも、大多数の科学者は、彼此の民族の生活上の特徴をなす自然地理学的、社会的、歴史的諸要素を何よりも先ず取り上げる。

差異はそれ自体で存在するのではない。他者との接触のみ、つまり外部者(異邦人)との比較が、その他なる文化要素に差異的属性の地位を与える。他の地域文化に関して異なった機能を働かす属性は所与の共同体に統合される。すべての文化における類似性の現存は、非常に類似した文化間においてさえも文化的距離の現存を排除しない。我々はこれらの国民的特殊性をもつ文化の構成要素を考察しよう。

最初に、民族差別的文化的属性を自己同一化するために、少なくとも二つの文化の相互作用を考察する必要がある。他の民族集団とのコミュニケーションにおいてのみ、民族と文化にとって特殊なものが実現され、形成され、固定化される。第二に、民族的文化的共同体の特殊な差異は人間の活動の領域における相違により決定される。しかしながら、文化のあらゆる構成要素の中には、さまざまな民族的文化的共同体の代表者達にとってコミュニケーションの基礎を形成する共通のものがあるということを考察することは必要である。

一連の民族統合的かつ民族差別的的特性としての地方の価値は和解と分離の手段でありうる。

民族間異文化間の相互理解についての諸問題に関する現代の研究は、この異民族異文化の現象を研究する複合的な方法を熱心に見出そうとしている。理解は人間のコミュニケーションの過程と結果であり、またコミュニケーションはある状況の中で実施されるから、さまざまな文脈を考慮に入れる必要がある。

コミュニケーションの過程の否定的結果は誤解である。完全な誤解の一例は、異なった言語でコミュニケーションしようとすることである。しかしながら、言語レベルでのコミュニケーションに失敗した後、相互理解は非言語的コミュニケーションによって達成されるような状況を想像できよう。誤解はしばしば空隙によって生じる。

異文化とそのテキストに接触しながら、その受容者はそれを地域文化のプリズムを通して見る。それは、異文化の特殊な現象への誤解を予め決定する。それ故、他の文化を理解する時に生じる困難さを明らかにし、精査することが可能となるような概念的術語論的道具をもつことが必要である。そのような道具は、異文化との接触の状況下において、民族的・文化的共同体の国民文化的特殊性を記述するのに使用される。

空隙理論のこの発展段階において、言語文化において普遍と特殊との問題への幾つかの基本的なアプローチがある。これらのアプローチの枠組みにおいて、いろいろな方法と、また意識、言語及び文化に対して空隙を確立するいろいろな方法も与えられる。科学においては空隙の現存はしばしば言語学的・文化的普遍の「機能」というメカニズムによって説明される。これらの観点は、我々の意見では、最も容認され易いものである。実際、普遍的とさえ考えられる、文化と言語のある現象は、特別に国民的な形態において、地域文化の中に現れる。さらに、もっと空隙的な現象がある。言語的障害がない場合でさえも、文化的差異は異文化コミュニケーションの障害となりうる。言語の違いはもっと深い空隙へと文化的差異を変容する。

所与の文化の担い手の精神的特徴と国民性に関連して、地域文化に特有な知識の複雑さは、あるタイプの受容者を形成する。そのタイプの受容者は、文化的同一性に特徴的なコミュニケーション行為の特定の構造をもった人格についての知的情緒的イメージとして考えられる。異文化を意識する時に空隙を見出すのは、二つの異なった文化に属する受容者の間の差異を明らかにすることを意味する。

もし一つの特殊な対象や出来事ないし特定の過程や状況の理解が別の文化と対立し、通常の経験の範囲と衝突するならば、空隙は経験される。こうして、空隙理論は、異文化的状況に出会った時にかかる「文化のメガネ」なのである。「文化のメガネ」を通して我々は現実を識別する。その「文化のメガネ」は、いかに我々が文化を知覚し解釈し、また人が経験する空隙に対して責任をもつかについて決定する。

空隙は経験のギャップ、知識の不足である。一方では、受容者は空隙を何か、理解しえぬもの、尋常ではないもの、異国的なもの、奇妙な、未知の、間違った、不正確なものとして知覚する。他方では、受容者は空隙を余計なもの、驚くべきもの、特異な、予期せぬもの、予言できぬものと経験する。空隙は受容者に衝撃を与え、また解釈を要求する諸断片であり、それらは受容者の注意の限界を超えたところに横たわっている。

空隙を取り除く過程は、些細なものではない。適正な翻訳と理解は、翻訳に対応した解釈がある時にのみ、達せられる。精神的、認識的、情緒的、公理論的不一致は社会的矛盾、誤解、同じ政治的現実についての対立した評価へと導く。社会的、政治的立場と関心は、この場合、決定的役割を果たす。しかし、感性の不一致においてその現象は示される。即ち、2005年9月、デンマーク

の新聞、ジュラン・ポストは10枚の風刺画を刊行した。それは予言者ムハマッドとイスラームの直接的嘲笑として多くの人々によって理解されてきたものである。この出版への反動は極端に否定的であった。この場合、空隙が一般大衆の意識と世論に及ぼした影響が問題として取り上げられた。

ここでは二つのことを考察する必要がある。第一に、言論の自由は重要な価値ではあるが、それは絶対的ではない。それは多くの価値の中の一つであり、他の価値を鑑みて縮減されうるものである。第二に、さまざまな国々では言論の自由に関する法律は、同一の制限をしてはいない。現代のロシアとアメリカでは、言論の自由の保護に関する法律はおそらく最も自由である。

国家主義、国際主義、世界主義は単に異なった政治的立場だけではなく、また異なった意識の心情的構成、異なった世界観、異なった現実への理解の仕方、即ち、さまざまな自己同一性のメカニズムでもある。それ故、「他者(外国人)への寛容」、「弱者」への共感や慈しみ、傲慢に対する罪深さを説くイデオロギーなくしては、強固に階層化された社会では相互理解は達成されないであろう。一般大衆の意識と異文化コミュニケーションにおける概念的空隙を取り除く科学的理論によってのみ、それを達成することができよう。

参考文献

第一章

1. Andreev E.M. A new social reality: methodological problems of the integrated socially-philosophical and sociological analysis. Materials of the Round table on a theme "Mutual relation of the person and a society in conditions of socio-economic instability". // The Society and Right. 2009.5 (27). P. 19.
2. Drobenkov V.I. Russian society: modern condition and prospects // Russian society and sociology in XXI century: Social calls and alternatives: Scientific conference "Lomonosov's readings – 2003": Moscow, the Moscow State University. - Moscow: MAX Press, 2003. - 495 p. - P. 3-19.
3. Vinogradov V.D. Modern type of the Russian society: social structure and statehood. // The Society and authority: problems of interaction. – St. Petersburg: Publishing house of SPb. University, 2006. - P. 50-51.
4. The Authorship of the term belongs to V.L.Shejnis.
5. Zudin A. Regime of Vladimir Putin: contours of new political system. -, Carnegie's Moscow Center, 2002.
6. Holodkovsky K.G. To the question on political system of modern Russia // <http://www.perspektivy.info/rus/>gos/k_voprosu_o_politicheskoy_sisteme_sovremennoj_rossii_2009-03-02.htm
7. Pivovarov Y.S. Russian's authority and the public policy. A note of the historian about the reasons of failure of democratic transit. // the Policy, 1.2006. P. 17.
8. News, 12/9/2005.
9. Krasnov M. Constitution in our life. // Pro et Contra, 2007.4-5.
10. Holodkovsky K.G. To the question on political system of modern Russia //<http://www.perspektivy.info/rus/>gos/k_voprosu_o_politicheskoy_sisteme_sovremennoj_rossii_2009-03-02.htm
11. Rogov K. Unacceptable successor. // Pro et Contra, 4-5.2007.- P.12.
12. Makarenko B. New law on elections and evolution of regime. // Pro et Contra. 2006.1. - P. 96.
13. Holodkovsky K.G. To the question on political system of modern Russia //http://www.perspektivy.info/rus/gos/k_voprosu_o_politicheskoy_sisteme_sovremennoj_rossii_2009-03-02.htm

14. Holodkovsky K.G. Results of a cycle of election campaigns and political system of Russia. - year of a planet: the Policy. Economy. Business. Banks. Formation. Issue. 2004. M.: Joint-Stock Company "Publishing house Economy", 2004. - P. 111-112; Holodkovsky K.G. Resource and prospects of regime. - Results of the twentieth anniversary of reforms. - Moscow: ИМЭМО the Russian Academy of Science, 2006. - P. 96.
15. Holodkovsky K.G. To the question on political system of modern Russia // <http://www.perspektivy.info/rus/>gos/k_voprosu_o_politicheskoy_sisteme_sovremennoj_rossii_2009-03-02.htm
16. Gaman-Golutvina O.V. Changing role of the state in a context of reforms of the government: domestic and foreign experience. The policy, 2007, 4. - P. 35.
17. Nikovskaya L.I., Yakimets V.N. 2007. The public policy in modern Russia. - Politology, 1.- P. 32.
18. Krasnov M. Constitution in our life. - Pro et Contra, 4-5.2007. - P. 40.
19. Petrov N. Demounting of mechanisms "protection against the fool". - NG Policy, 5.02.2008.
20. Rimskij V.L. Bureaucracy, clientelism and corruption in Russia.-Politiya, 2007, 1. - P. 73.
21. Furman D.Dilemma of Medvedev. // the Independent newspaper, 2008.7.02.
22. Pshizova S.N. A policy as business: the Russian version. // the Policy, 3.2007. - P. 72.
23. Kiva A. 2007. What regime is formed in Russia? - A free idea, 12. - P. 15. Not less categorical estimation belongs to French historian Alain Blum, director of the Center on studying Russia, Caucasus and the Central Europe Schools of the Maximum social researches: [http://www.polit.ru/research //2005/01/27/polit_system_print.html]
24. Afanasijev M.N. Intolerable weakness of the state. - 2006. - P. 262.
25. Konovalov A. When sleeping will wake up. // the Independent newspaper, 2008, 22.01.
26. Vinogradov V.D. Modern type of the Russian society: social structure and statehood. // The Society and authority: problems of interaction. - St. Petersburg: Publishing house of SPb. University, 2006. - P. 45.
27. Reshetnikov M. Democracy, terrorism and a civil society: tendencies, contradictions, historical illusions // the Telescope. 2004.6. - P. 4.

第二章:

1. T. Danilchenko. World of lacunas - Krasnodar, 2010.
2. T. Danilchenko. Philosophy of lacunas - Krasnodar, 2010.
3. Jens Olaf Jolowicz. Lacuna theory in intercultural communication - Moscow, 2006.
4. Lipset S.M., Rokkan S. Cleavage Structures, Party Systems and Alignments: an Introduction // Party Systems and Voter Alignments / Ed. by Lipset S.M., Rokkan S.-New York, 1967. - P. 1-64.
5. Smirnjagin, L.V. Region of the USA [Text] / L.V.Smirnjagin. - M., 1989. - P. 30.
6. Mahonina, A.A. To a question on classification of Languages lacunas [Text] / A.A. Mahonina // Language and national consciousness. - V.4. - Voronezh, 2002.
7. The text as the phenomenon cultures [Text] / G.A. Antipov [, etc.] - Novosibirsk, 1989. - 197 p.
8. Bikova, G.V. Phenomenology lexical lacunas [Text]: The monography. - Blagoveshchensk: Publishing house BGPU, 2001. - 179 p.
9. A role of the human factor in language: Language and a picture of the world [Text]: The monography / B.A.Serebrennikov [, etc.] - M., 1988. - 216 p.